

発達障がいの子どもたちの支援と居場所づくりを地域住民と一体となって展開する注目のクラブ。

発達障がいの子どもたちの卒業後の進路に対する危機感からスタートした「サポートクラブ翔」。NPO法人化とともに、放課後等デイサービスや障がい者スポーツへの取り組みなど、活動の翼を大きく広げようとしている。その鍵となるのは、子どもたちと地域住民との協働・共生である。発達障がい児(者)支援のモデルケースを目指した試みが続く。

子どもたちが生き生きと過ごせる居場所を目指して。

発達障がいとは、発達に偏りがあり、そのため生活に困難を抱えている状態である。主に乳幼児期からその特性が現われ始め、自閉症、学習障がい、注意欠陥・多動性障がいなどに分類されているが、一人の子どもがいくつもの障がいを持っていることもまれではないし、その症状も個別的である。子どもに限らず、最近では大人の発達

障がいも増えているとされ、社会生活や人間関係などに困難を抱えているケースも珍しくない。原因の主なものは脳の器質的な問題であり、決して親の育て方の問題ではない。子どもの場合、障がいがあっても心身は発達するので、その特性や状況に合わせて、きめ細かい支援を行っていくことが大切である。

山口県周南市のサポートクラブ翔は、発達障がいの子どもたちの支援を行っている。2010年7月に設立され、2012年4月からはNPO法人として事業を展開している。

「地元の総合支援学校を卒業しても、近隣の施設や作業所などは定員がいっぱいの状態。どこにも行くところがない。そんな危機感を持つ保護者が集まり、子どもたちが少しでものびのびと過ごせる居場所を作ろうということで活動を始めました。行政の無理解や活動資金の確保など、さまざまな問題がありますが、実績を積み上げることで評価してもらいたいと思い、地道に活動を続けてい



活動を行っている長穂小学校内の様子



療育メニューの一つの障がい者スポーツ



老人と交流しながら農作業を教えよう子どもたち

ます」と話すのは、事業部長として奮闘している岡崎重正さん。子どもたちの支援や療育に役立つという話を聞けば、それを学ぶために駆けつけ、また、さまざまな助成を得るためのアンテナを張ることも怠りない。それもこれも、「子どもたちにいろいろなことを体験してもらうことで元気に成長してほしいし、少しでも社会参加のきっかけになればいい」という思いがあるからである。

地域住民と一体となって発達障がいの支援に取り組む。

発足当初は取り壊される予定の市営住宅の一角を借りて活動場所としていたが、2011年4月から休校となった山間地の長穂小学校が借りられることになり、そこに拠点を移した。休校になって放置されていたので、子どもたちが安心して安全に活動できるように設備の補修や整備、備品の購入、さらに毎月、地域住民に向けて活動の様態を伝えるために発行する『翔だより』というリリートの制作などにAJOSCの助成が役立てられた。

「活動の利便性からいっても、現在の場所は最適です。さらに将来的には、過疎化や高齢化が進むこの地域の老人との交流を図りながら、休耕田や耕作放棄地を利用して農作業を教えよう、総合支援学校卒業生の就労の場にした。また、閉じこもりがちな老人が気軽に出かけられる場所、茶飲み話ができる場としても、地元で古くか

担当者より



自分たちの活動を理解していただいたことがなによりうれしい。

NPO法人障がい児(者)サポートクラブ翔 事業部長
岡崎重正さん

何度かやめようと思ったこともありますが、子どもたちの笑顔を見ると、がんばろうという気持ちになれる。その気持ちを後押ししてくれたのがAJOSCの助成です。こうした助成がなければ活動を継続できないという現実があるだけに、本当に感謝しております。発達障がい児(者)支援の全国の見本になるようなクラブになれるようがんばります。

らある小学校はびったりです。そういう形で、地域のお年寄りや健康者などと交わることが、子どもたちにとっても、地域住民にとっても必ずプラスになると信じています。そのため、親子参加イベントという意味合いも兼ねて、ホテル祭り、地区大運動会、美化活動などの地域の行事には積極的に参加させていただいています。幸いなことに住民のみなさんからは、地域が明るくなった、活性化したという声をいただき、地域のメンバーとして認知されるようになりました。これからも一緒になって、さまざまな活動をしていきたいと思っています」と、岡崎さん。

サポートクラブ翔では、障がい児(者)の日中一時支援・放課後等デイサービス、発達障がいの子どもの支援を考える定期的な学習会、発達支援のためのさまざまな療育メニューの提供などのほか、今後、障がい者スポーツ、母親同士のコミュニケーションの場としての「語り合ひましょ」開催などに力を入れていきたいという。スポーツ関係では5月からサッカークラブを立ち上げる予定になっている。「支援が必要な子どもたちは増えています。だから、こうした事業は必ず必要性が高まる。今後、同じような団体が出てくると思いますが、その人たちが心おきなく活動できるようにするためにも、いま僕らががんばって環境を整備しておきたい」と話す岡崎さん。その話を聞きながら、志の高さや使命感に頭が下がる思いだった。